

喜多方市の3つの共通実践② 自己肯定感を育む活動の充実

1 Q-Uの活用

教師は常に子どもたちの成長を見守っています。児童生徒理解の方法として、観察法、面接法、調査法等がありますが、それぞれメリット、デメリットがあり、それぞれを取り入れて総合的に児童生徒を理解することが重要になってきます。現在、全国で行われているQ-U (Questionnaire Utilities) は標準化された複数の心理検査を組み合わせるものであり、



テスト実施後の学級経営の方針作成資料となるため、喜多方市でも、全小中学校で行うこととしています。

(小5、6年、中1年 他の学年は学校の判断による)

Q-Uは、1人1人のデータから、不登校になる可能性の高い子ども、いじめを受けている可能性の高い子ども、学校生活の意欲が低下している子どもなどを発見し早期対応につなげられます。また、学級全体のデータから、「なれあい型」「管理型」など集団の傾向をタイプ別に把握することで、教師はこれまでの指導を見直し、問題解決に向けて学級経営や授業を工夫することができます。Q-Uの結果を学級集団づくりに活かすことで、友達と励まし合ったり、協力しあったりすることで、自己肯定感や承認感を持てる学級集団をつくりましょう。(詳細は、喜多方の学校教育 資料9 Q-U、学級力レーダーチャートの活用参照)

2 自分や友だちのよさを認め高め合う

これまで本市では、「なかたくタイム」を共通実践事項としてきましたが、朝の会や帰りの会、学活の時間に振り返るだけでなく、授業中や休み時間などあらゆる教育活動の機会を通じて、自分や友だちのよさを認め合うことで、より自尊心や自己肯定感を高める場を見逃さず児童生徒に関わってほしいと思っています。

各校においては、全教育活動の中で自分や友だちのよさを認め高め合う教育活動の実践の積み重ねをお願いします。なお、これまでの「なかたくタイム」で十分効果がある場合は、ぜひ継続実践を行ってください。

(詳細は、喜多方の学校教育 資料9 Q-U、学級力レーダーチャートの活用参照)

・「敬称を付けて呼ぶ」

中学校の授業を参観していると、まず気づくことが、子ども達のところを「呼び捨て」にして呼んでいることです。子ども達を「敬称を付けて呼ぶ」ことは、子ども達に自己存在感を芽生えさせ、自己肯定感を育むことのスタートとなるものです。小学校も同様の取り組みをお願いします。



ねらい

- (1) 教師が児童生徒を、または児童生徒同士が、児童生徒のことを「〇〇さん」とん付けで呼び合うことで、相手に対する敬意、尊敬の念を伝える。
- (2) 呼ばれた児童生徒は、「〇〇さん」とさん付けで話されることにより自己存在感、集団への所属感を持つことにつながり、これらを通して個々の自己肯定感を育む。

留意点

- (1) 教師が児童生徒を、また児童生徒同士が「〇〇さん」と呼び合う。
- (2) あだ名で呼ぶことや名前を省略して呼ぶことは、「いじめ」につながる(相手を尊重していない、差別している、格付けしている)ことを伝え、敬称を付けて呼ぶことの意義をしっかりと指導する。